

靖国神社の明月



マーシャル方面遺族会
(旧クェゼリン方面戦没者慰霊会)
〒103 東京都中央区
日本橋人形町1-8-2
電話 03-3661-8760
振替口座東京0-93487 番
編集兼発行人 秋本英郎



会員章 (バッジ)

平成三年度
慰霊祭 総会
佃 喜美

今年の総会で会則が変更され、今迄毎年二月の第二日曜に行われていた慰霊祭・総会が、本年は四月七日(日)に行われました。社頭の桜は満開の好季節でしたが、生憎夜来の雨で重く枝を垂れうす桃色に煙っていました。

例年より早く午前八時に受付が開始され、一年振りに集った一七二名の遺族と会友達はお互いに元気な姿を喜び合い昇殿参拝の時を待ちました。慰霊の団体数は年々増えるようですが、神社側のお扱いは変わらずご丁重です。定刻手水の後昇殿に進み修祓を受けご本殿に昇りました。

献饌、祭主祝詞奏上、玉串奉奠、続いて佐藤会長の祭文奏上、遺族代表者の玉串奉奠と、祭事は滞りなく厳かに執り行われました。各人の胸に去来する想いは等しく、亡き肉親に対する黙禱の後には静かに涙を拭う人々の姿が其処処に見られました。

ご本殿より退下し、ご神酒を頂き参集所に戻りましたが途中、松平宮司が廊下に立たれ我々一人一人に黙礼をしておられたお姿が強く印象に残りました。

次いで会場を靖国会館に移し、第二十八回定期総会が午前十時二十五分から開始されました。昼間常任幹事の司会により、会長挨拶、続いて秋本常任幹事を議長に指名し、会務報告、平成二年度会計決算(別掲)報告、監査報告、平成三年度会務計画、平成三年度予算案(別掲)提案等、それぞれの担当者により行われ、いづれも異議なく拍手を以て承認されました。次に、任期満了による役員の変更が行われ、会長から全役員と、事務局の佐久間さんを紹介されました。

以上で議事を終了し、引き続き懇談会に移り秋本常任幹事が司会を担当、最初に本会の運営についての説明があり、

目次

慰霊祭総会直会	佃 喜美	1
日本遺族会主催の慰霊巡拝		4
行動概要 日程 参加者		
慰霊巡拝に参加して		5
吉良 正義 吉田 操		
西田 恒子		
環礁ミレー抄(16)	成宮芳三郎	7
帰ってきた遺品	上田 文子	8
お便りの中から		
中村 順子 井上 義夫		8
ブラウン環礁の玉碎(6)		
..... 矢野 雄三		9
ブラウン環礁座談会		13
日付変更線について		
..... 蓮尾 諭吉		15
北満からマーシャルへ(3)		
..... 秋元 輝夫		16
島は八百 マーシャル群島(2) 能伸 文夫	17
慰霊祭参列者芳名		18
お便りの中から	富田 ミツ	18
事務局日誌		18
寄付者芳名		19
現地慰霊を希望する方々へ		20
本部だより		20

次に①会報「環礁」に投稿を御願いたい②会員の増加を図りたい③役員を増加したいが推薦或いは名乗りを挙げてほしい、の三点を要請された。続いて会員からの意見発表があり、①会員が少ないのは本会のある事を知らない人が多いせいなので、適切なPRをしてほしい。②生還者にも、もっと加入してもらいたい③役員は若い人にもなってもらいたい等々の活発な発言があり、午前十一時四十分、来たる八月の国主催の戦没者追悼式や沖繩での追悼式等の参加希望者を確認して懇談会を終了し、来年三月二十九日(日)午前十時靖国神社での再開を約して解散しました。雨のため全員の集合写真を撮ることが出来なかったのはとても残念でした。

直会旅行会

第二十二回直会旅行会は、千葉県銚子の犬吠崎グランドホテル磯屋で行われました。慰霊祭終了後、不参加の皆様とお別れし直会参加者五十三名は国際観光のバスに乘車、〇時三十分出発しました。満開の桜花がやさしく見送ってくれるのですが、降り続く雨に忽ち車窓は曇り、窓外の眺めは無くなって行きます。

お弁当、お茶、そして会長様の奥様差し入れのみかん迄が配られ車内は次第に活気づき、遅れた昼食をとり乍ら、雨の東関東自動車道をひた走りま

した。

潮来インターで高速道を下り鹿島神宮に詣でました。此処も花は満開でしたが降る雨に冷たささえ加わりました。和やかな雰囲気の中でお話しに興ずる中、予定の通り午後五時過ぎ無事に犬吠崎のホテルに到着、部屋割に従ってそれぞれの部屋に到着しました。幹事様のご配慮で各部屋のドアに在室者の名前が貼り出されて便利でした。早速お風呂に入る人、お部屋毎の行動が始まりました。やがてマイクによる宴会開始の報で会場に集合、会長様のご挨拶に始って、海の幸を賞味し



香 取 神 宮

乍ら、ホテルサービスのショーを観賞したりしました。自己紹介もありましたが、お国なまりも和やかに新しいお顔振れが増えてゆく事は嬉しい限りでした。宴たけなわとなりカラオケ等も出ましたが、今年は女性軍の活躍が少しなかつたように見受けられました。午後九時近く一応のお開きとなり、お部屋に戻り再びお風呂に入る人、売店でお土産を整える人、お話しに興ずる人、それぞれに楽しい一時を過ごして、太平洋の荒波と雨の音を子守唄に眠りにつきましました。

翌日は午前七時半の朝食、会場で記念撮影をし、午前九時ホテル出発。近くの地球が丸く見える丘展望台に上ったのですが、強い風とチラつく雨に大急ぎで一巡し、地球が丸い事を一応納得して香取神宮に向いました。

雨は降り続きます。ガイドさんが苦労して、文字クイズを送り、知事選挙結果のラジオ放送を聞いたりしながら香取神宮到着、雨の桜は矢張り風情のあるものでしたが、道がぬかるんで危いので行ける人達だけ奥社に詣り、小雨の中で記念写真を撮りました。

次ぎは成田山新勝寺参拝。小雨の中を一まわりして、海老屋

で昼食、お土産を頂き、午後一時二十分出発。三十分程で宗吾霊堂に到着しました。丁度四月八日の花祭りで、お釈迦様が飾られてあり、皆様甘茶を注いだり頂いたりして熱心に拜んでおられました。

それから、宗吾御一代記念館に入りました。十三場面に等身大の人物で、義民宗吾の生涯を再現されたパノラマは、説明する女性の宗吾様、宗吾様と云う声のひびきと共に涙なくしては見られませんでした。しみりと最後の見学を終えてバスに戻り、一路東京への帰路に就きました。

車中、あの椰子の島の合唱、ビデオ観賞などしながら、大した渋滞にも遭わず予定通り八重洲口に到着、大部分の方が下車し、九段会館にお泊りの方と役員の方々をバスに残して楽しく送り多かつた直会の二日間を終りました。

△正 誤 訂 正△

環礁54号中に校正ミスにより次の誤りがありましたので訂正いたします。

3頁2段の電話「五五一」は「五五二」に、10頁1段の「別弁」は「別辞」に、同頁1段の「秋元輝一」は「秋元輝夫」に、同頁4段の「固難」は「困難」に、11頁1段の「族団」は「旅団」に、「旅団」は「旅団」に、同頁4段の「要墓」は「要塞」に。

「要墓」は「要塞」に。

日本遺族会主催の慰霊巡拝

「クエゼリン、マロエラップ、ウオッセ」

日本遺族会主催の平成三年度マール諸島戦跡慰霊巡拝は、目的を充分達して全員無事に帰国されました。

行動概要

「日本遺族通信より」転載

日本遺族会主催のマール諸島戦跡慰霊巡拝団(団長・飯森照男福祉課長他団員十二人)は、マール方面遺族会の協力を得て、四月二日成田空港を立ちグアム島を経てマール諸島共和国の首都マジュロ島へ、飢餓の島ウオッセ、マロエラップ、玉砕の島クエゼリンの各島で四十六年余の思いを込めて慰霊追悼を行い四月九日帰国した。

今度の慰霊巡拝は当初三月中旬に計画したが、出発直前に現地の飛行機が故障したために四月に延期して実施した。

四月二日 グアム到着後直ちにジーゴの太平洋戦争戦没者慰霊公苑へ。夕闇せまる中での慰霊追悼を行う。

四月三日 早朝グアム空港を立ちトラック、ボナベ、コスライ、クエゼリン各島に立ち寄り夕方マジュロ島へ。今回巡拝でお世話になる山村要氏や多数の日系人の出迎えを受ける。ここも異常気象で数日来豪雨が続いており、

むし暑く明日からの巡拝に不安をおぼえる。

四月四日 昨日の雨が嘘のように晴れわたり、チャーター機で出発。米軍の上陸は免れたが補給が断たれ、飢餓との戦いを強いられたマロエラップ、ウオッセ島へ、炎天下での慰霊祭、涙と汗で目がかすむ。司令部跡など当時の偲ぶ残骸が多く残っている。

四月五日 玉砕の島クエゼリン島へ。現在は島全体が米軍の基地となっており、司令官や関係者の暖かい歓迎を受け、空港脇にマール方面遺族会が建立した日本人墓地へ。雨の中あわただしく慰霊祭を、日本人墓地はよく整備されており安堵する。

四月六日 政府がマジュロ島に建立

した東太平洋戦没者の碑のある平和公園の向い側の海岸で、遠くフィリピン、ヤルト島を遙拝しての慰霊祭、公園を清掃し午後、碑前で合同追悼式を行う。

約三十個の環礁と約八五〇の珊瑚島からなる美しいマール諸島、日系人や現地人の暖かい心にふれ再び慰霊巡拝に訪れることを誓い帰国の途についた。

日程

△団長 飯森照男▽

四月一日(月)曇。13..40から九段会館で結団式、靖国神社参拝壮行会兼夕食会。

第一日目 二日(火)曇。6..55九段会館発 8..45成田空港着 10..55コンチネンタル航空962便で同空港発 13..55サイパン空港着 15..49同空港発 16..12グアム空港着 17..55太平洋戦没者慰霊公苑で慰霊祭、グアムプラザホテル泊。

第二日目 三日(水)晴後曇雨。8..06コンチネンタル航空956便でグアム発 9..26トラック着 10..08同空港発 11..13ボナベ着 11..51同空港発 12..40コスライ着 13..24同空港発 14..20クエゼリン着 15..10同空港発 15..53マジュロ空港着(現地時間17..53、以後は現地時間)、マジュロホテル泊(以後同ホテル連泊)。

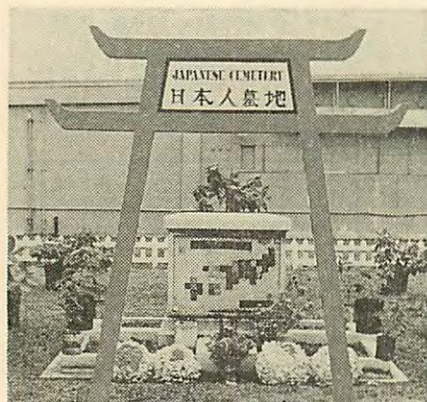
第三日目 四日(木)晴。9..28エ



軍服姿はマックネイル司令官

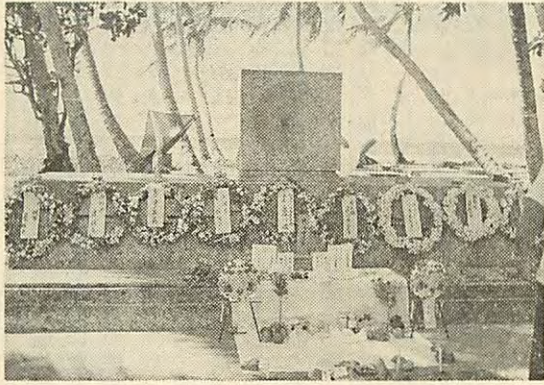
アーマールシャルチャーター機(ドルニエ機15人乗り)でマジュロ空港発 9..56マロエラップ島着(入島税一人ドル)慰霊祭 11..10同島発 11..26ウオッセ島着、慰霊祭 16..40同島発 17..15マジュロ空港着。

第四日目 五日(金)晴後雨。機種の関係でクエゼリンには団長、団員六名と添乗員だけが行く事になった。8..18アーマールシャル332便(ドルニエ機・19人乗り)マジュロ空港発 9..08アイロック島着 9..20同島発 9..38ローエン島着 9..51同島発 10..14クエゼリン空港着、メアリアンヌ・デイオンヌさんとアキ・ホールさんの出迎えを受ける。雨中をマールシャ



ル方面遺族会が建立された「マーシャ
ル・ギルバート諸島戦死者忠魂慰霊碑」
前で慰霊祭の後島内を見学。15・00ジ
ヨン・マックネイル司令官が自ら車を
運転され、滑走路はすれにあるトーチ
カ跡と一緒に記念写真を撮る。17・03
コンチネンタル航空956便で同空港
発 17・44マジュロ空港着。
第五日目 六日(土)晴。9・30ホ
テル発 10・00平和公園着、海岸で慰
霊祭 終わって公園内の清掃 11・40
ホテル着 13・45ホテル発 東太平洋
戦没者の碑前で合同追悼式を挙行 19
・00「長寿庵」で現地日系人と交歓夕
食会。

東太平洋戦没者の碑



第六日目 七日(日)曇。10・15島
内見学(ローラ岬、台風災害救援記念
碑他)。
第七日目 八日(月)晴。11・03コ
ンチネンタル航空957便発 11・42
クエゼリン空港着 12・21同空港発
13・50ボナベ空港着 14・58同空港発
17・30(現地時間15・03以後は現地時
間)グアム空港着 15・40島内見学慰
霊の為バス発 プラザホテル泊。

第八日目 九日(火)晴。3・45ホ
テル発 5・40コンチネンタル航空9
61便(DC-10型機)発 6・02
サイパン空港着 7・05同空港発 10
・00成田空港着(日本時間9・00)解
団式。
以上、時間を追っての日程のみを記
しましたが、記憶がいにより時間等
が違っているかもしれませんが、その
際はおゆるし下さい。
今回の慰霊巡拝の実施に際しまして
は、団員の皆様の真摯な態度と、日本
遺族会に対するご協力や、マーシャ
ル方面遺族会の佐藤会長、秋本常任幹事
はじめ皆様の全面的なご支援を賜り、
英霊の眠る地での慰霊追悼を滞りなく
終え、目的を十分達成することができ
ました。心より感謝申し上げます。

参 加 者

団長 飯森 照男(日本遺族会)
ウォッセ班(六名)

浅井 富夫 ○西田 恒子

○吉田 操 ○川島美恵子
○徳田 叶子 清治 政次
クエゼリン班(六名)
並木 三郎 大石 範三
○玉那覇タケ ○玉那覇有賢
佐久本トシ ○吉良 正義

添乗員 川添 朝男(KK日本旅行)
(氏名の上の「○」印は本会会員)
日本遺族会の
慰霊巡拝に参加して

参加された皆様の所感文のうち、日
程など共通のものは一部を割愛させて
頂きました。
西田恒子様からはマロエラップとウ
オッセのビデオテープ二本が寄贈され
ました。

会友 六十一警 吉良 正義

平成三年四月二日待ちに待った慰霊
巡拝出発の朝を迎え、前日結団式を終
えた飯森団長以下十三名は日本旅行の
川添さんと共に、十時十分成田空港を
あとに南に向って旅立ちました。

サイパンを経由しグアムに到着、先
ずグアムにて最初の慰霊祭を行い一泊
して次の巡拝地へ向いました。トラッ
ク島の上空にさしかかると南洋特有の
雲の様子等に四十八年前行った時のこ
とが次々と思ひ出されてきました。定
期便なので次々に小さな島に着陸しな
がら、四月三日の日本時間十三時二十

分にクエゼリンに着陸、この日は機外
に出ることはできませんでしたが、滑
走路が長くなり立派に舗装され、椰子
の木は少なく島の様子が変わったこと
に驚きました。とにかくやっとクエゼリ
ンに来たんだと感慨一入でした。三日
夕刻マジュロ着、山村さん(本会の篤
志会員)ほか大ぜいのお出迎えをう
け、感激しました。

四日は十六人乗り位の小型機でマロ
エラップ、ウォッセの巡拝でしたが、
島の滑走路は砂利のまままで機体は激し
く振動しながら着陸しました。ウォッ
ッセで慰霊の後、山村さんに案内して頂
きました。

元日本軍の指令本部の残骸やゼロ式
戦闘機等も残っていて爆撃の激しさを
物語っていました。山村さんのおかけ
で島の対日感情は良く飛行機の待時間
に現地の方々から椰子、パンの実、マ
ンゴ等や唄の接待を受け、ひととき島
の情緒を味わった後マジュロへ向いま
した。低空飛行の小型機から見たマー
シャルの海は昔と変りなく大変美しく
穏やかな表情を湛えていました。

四月五日いよいよクエゼリンの巡拝
の日になり、この日は飯森団長とクエ
ゼリン班六名に添乗員さんの八名で小
型機に乗り十一時に到着、遂に私はク
エゼリンの土を踏むことができました。
アキ・ホールさんとマリアンヌ・デ
イオンスさんの案内で先ず基地の応接

間に通され、お茶を頂いた後墓地に向
きました。日本人墓地に着いた時は激
しいスコールで雨の中の慰霊祭になり
ました。皆さんそれぞれに持参の供物
を供へられ、私も大分から持って行っ
た銘水をお供えし、線香に火をつけ
「海行かば」のテープをかけて全員で
黙禱を捧げた後各々お参りしました。

私は慰霊碑の前で亡き戦友に語りか
けたのですが、さまざまな思いが胸一
杯になり名前を呼んだだけであとは言
葉にならず「やっと来たよ」と心の中
で言いながら合掌しました。慰霊祭の
終る頃には雨もあがりました。きつと
戦友達が涙で迎えてくれたのでしょ
う。

慰霊祭の前に少し時間があり売店で
買物をした時に、私が戦時中クエゼリ
ンで勤務していたことをアキ・ホール
さんにお話したことが、マリアンヌ・
ディオヌさんを通じて司令官のお耳
に達し、昼食後マックネイル司令官が
わざわざお出でになり御自ら車を運転
して島内を御案内下さり記念写真まで
撮らせて頂き、また私は司令官直筆の
メッセージの入った貴重な資料を頂戴
し、思いもかけない光栄に浴しまし
た。

司令官には御予定外の特別なお心遣
いを頂いたと伺い、温厚で寛大なお人
柄に感激致しました。司令官のメッセ
ージは「戦時中母国のために働いた私
達の間には特別な兄弟愛のようなもの

向って右マックネイル司令官



があります。私達には共通して同胞愛
や犠牲に対する理解を持っているだけ
でなく戦争が後の世代への遺産となら
ないよう共に願っています」この様な
内容です。

島内を案内して頂いた時に見た六十
一警備隊の兵舎のあったあたりとか棧
橋の位置等は、私の頭の中にあつたも
のと少し違うように思いましたが、こ
れは海を埋立てていただいた島が変つ
たためだとわかりました。島内は何処
も美しく整備されていました。元日
本軍の塹壕や高射砲のあった周辺はそ
のまま残っており、司令官のお話では
此処は公園にしてそのまま残しておく
とのことでした。名残りを惜しみなが
らクエゼリンに別れを告げ、翌日はマ
ジューロの東太平洋戦没者の碑前での合
同慰霊祭で、祖国のため同胞のため尊
い命を捧げられた多くの先輩や戦友の
御苦勞を偲びながら衷心より御冥福を
お祈り致しました。

巡拝日程は順調に進み七日は山村さ
んにマジューロ島内を案内して頂き、夜
は日本人経営の長寿庵で日系の方々
の夕食会が催されるなど色々楽し
い思い出もでき、現地の民芸品の買物も
すませ帰り支度を整えました。

八日は山村さんの丁寧なお見送りを
受けてマジューロを離れ、クエゼリン、
ポナベを経由してグアムに到着、四月
九日現地時間の五時三十分グアム空港
を離陸日本時間の九時成田へ着陸し無
事八日間の慰霊巡拝の旅を終りまし
た。

戦後四十六年私達は今平和に慣れき
っていますが、この平和は多くの方々
の尊い犠牲によって得られたものであ
りこの事実を風化されることがなく、二
度とあの様な悲惨なことが起きないよ
う次の世代へ申し継いで行かなければ
ならないと思います。

この度の慰霊巡拝に参加して長い間
の念願を果すことができ、これで私の
戦後に一区切りができました。これか
らの余生は戦友の冥福と平和を祈りな
がら自分なりに何かのお役にたつよう
に心掛けて生きて行こうと思ってお
ります。

慰霊巡拝中マジューロの山村さんには
心暖まるお世話を頂き感謝しておりま
す。最後になりましたが飯森団長様は
じめお世話下さった皆様に厚くお礼申
し上げます。

妹 吉 田 操

兄の米倉治雄は昭和二十年三月六日
ウオッセ島で戦死しました。二十六歳
でした。私たち妹五人はいつも、兄の
最後の地に五人揃ってお線香をあげに
ゆきたいと話合っていました。

このたび五人申込みましたが、都合
で妹久保田光子が行けなくなり、四人
で参加させていただきました。

先の大戦では一家の大黒柱を始め大
勢の方々が尊い命を亡くされました。
いまの日本を見る事もなく、亡くなり
てはならないと思います。

三日、マジューロの夜は大雨になりま
した。明日はどうかと心配しましたがが
神様、兄さんが守って下さって雨は朝
止み良いお天気になりました。マロエ
ラップ島でも巡拝させて頂き、ウオッ
ゼに向いました。島が見えてきまし
た。兄さん、兄さんと心の中で叫ぶ。

十一時四十分頃着。エメラルドグリー
ンに囲まれた美しい島、ウオッゼ。昔
の戦場とは思われない平和な島、兄は
何処に居るのだろう。立派に慰霊祭を
して頂きました。思わず兄ちゃん、兄
ちゃんと呼び出してしまった。どんな
にか私達の来るのを待って下さったの
でしょうね。長かったですね。御免な
さい。どんなにか大変な辛い日々を過
ごされた事でしょう。涙が止まらな
い…。二つ違いの兄は私の身近に何時

も居ました。何時も優しくかった。栗拾い、小川の魚釣り、思ひ出は山のようにある。終戦間近に私一人に夢に出てくれた。あの時が戦死した時かと今でも思っている。はっきりと姿が浮ぶ。「志を果たして 何時の日にか帰らん

山は青き故郷 水は清き故郷」

と歌にもあるではありませんか。立派だった兄さん、どんなにか故郷の親兄弟の事を思っていた事でしょうね。可哀想な兄さん、さあ兄さん、一緒に帰ろう。島のアチコチを歩き回る。発電所、貯水槽などは今でも住民の方が利用していました。兄の最後の場を探して歩く。兄の戦友たちが教えてくれた、兄の最後の所と思われる場所がありました。四人で花輪で囲んで拝みました。住民の方々にもいろいろと御世話になりました。パンの実、椰子の水等、美味しく頂きました。兄も食べていたんですね。静かな島、優しい住民の方々、此処に眠る兄を、せめて幸いと思いたい。でも私は悲しい。愈々島とも御別れの時が来ました。もう少し此処に居たい、もう少し……、双発機に乗り窓から島を眺める。段々と島が見えなくなる。でも何時までも見ている、兄に「さようなら」と言う。何時までも涙が止まらない。海岸に兄が立って見送って下さったような気がした。兄さん、さようなら……もうこれで二度とウオッゼを訪れる事は出来ないのだからか……兄さん安らかに御眠



り下さい。私は何時も兄さんの事を思い込んで居ります。立派な、私の大好きな兄さん。

妹 西田 恒子

靖国神社に参拝し、九段会館での壮行会、一夜を過ごした団長以下一行十三名は平成三年四月二日、成田空港を約五十分遅れて最初の巡拝地であるグアムに飛び立った。夕闇迫る頃、グアム慰霊碑に追悼式を終わる翌日、マジロ島へ。

トラック、コスライ、クエゼリンを経てマジロに着いたのは五時近かった。空港には日系人がレイを沢山持っていた。夜半物凄い雨、ウオッゼに行く事が出来なかったらどうしよう、南

無観世音菩薩様どうか夜明け迄に雨が止みませ様に祈った。願いが通じたのか、雨が上がった。四月四日、マジロ空港発九時十五分、チャーター機は飛び立った。

途中、マロエラップに降りた。そこには生々しくゼロ戦と思われる残骸が四十数年過ぎた今も、二機そのまま、悲惨だ。追悼式を挙げ終わって次の巡拝地ウオッゼに向かった。十一時四十分、見えた。マガタマ型の島が……ウオッゼだ。プロペラ機はウオッゼの草原に降りた。第四トーチカの処で追悼式。般若心経に続き川島(姉)と徳田(妹)の戦没者供養の御詠歌がカネの音と共に流れる……

八重の潮路をのりこえて

逝きにし人はいずこぞや

野末の露のあと尋めて

ありし姿ぞなつかしや

国の大事に召されては

願みるべき事もなく

心のまことに一筋に

捧げ尽くせし尊さよ

二十六歳の若さで死んだ兄、又、この地で命をたった人々の為に祈った。追悼式を終え昼食を済ませた皆が広場に歩き出して間もなく、現地の人が椰子で作ったと言うアメを私の前に差し出した。フト回りをみると……あった！

水槽、防空壕跡……地面がえぐられている。右を見ると半地下の建物、これぞ戦友の大堀さん、坂本さんから聞いた兄の爆死場所だ。兄が私達の足を止めたのだ。良かった。今は亡き母もどんなにか島に来たかった事か……私達姉妹四人は同行の玉那覇さんと回りの草を取り、防空壕跡に線香を上げ涙を新たにたいた。お兄さん、やっと日本に帰れるね。私達と一緒に帰ろうと兄の写真を胸にシャッターを切って貰い、その場を後にした。

思えば昨年四月二十八日、ウオッゼの集まりに出席出来、戦友の方々にお会い出来たからだ。母が亡くなる一ヶ月前、来年は靖国神社に行けないかも知れないとの電話から十三年目、母の思いが今やっとかなえられた。本当に嬉しい。ウオッゼ島の開発の為、議員さんが視察に来て一行に会われるとの事でしたが、視察が長引いてお会いする事が出来ませんでした。この島に眠る数多くの英霊のご冥福をお祈りします。

環礁「ミレー抄」(16)

会友 成宮 芳三郎

望楼の兵は降り来ぬいちめんに
爆煙あぐるを潮風消しゆき

どの兵も頬のまるみの失せたれど
ひとみ明るく黙し笑み居り

環礁に斃れし人に通へとか
スコールのあと虹かかりぬ

帰ってきた 遺品

Ⅱ 兄さん 万年筆貸してネⅡ

四月二十八日のブラウン座談会に、横須賀の上田文子さんが遺品数点を持ってきました。これらの遺品が帰ってきた経緯はおおよそ次の新聞記事の通りとのことです。

◇昭和34年6月19日(金)毎日新聞◇

14年ぶり母の手に

「日本兵の遺品」

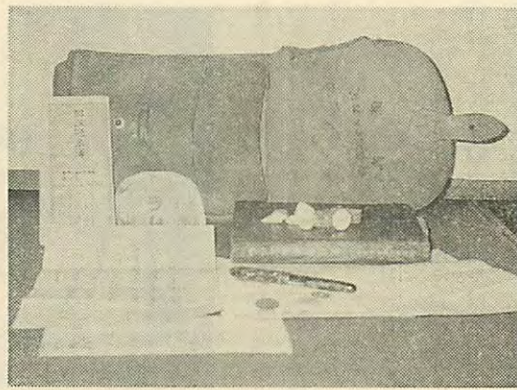
日系米人の好意で返る

◇…遺族の方に…とサンフランシスコ在住の日系米人が託した日本将兵の遺品が十八日、横須賀市役所民生部の手から遺族に返された…◇

昨年夏、練習艦「はるかぜ」が第二回の遠洋航海に参加、サンフランシスコに寄港したとき、カリホルニア州サクラメント市九番街二三〇〇に住む日系米人「越水実」さんと名乗る人が同艦を訪れ「高瀬」と書いた「焼け残り」の日の丸の旗、「鶴岡八幡宮のお守り」「貯金通帳」「伍長階級章」「ラジオ技術教科書」「時計」「万年筆」「図のう」それに現金「九十一銭」を「日本兵の遺品と思うので遺族に渡して貰いたい」と差し出したもの。同氏はマール群島ブラウン島で戦争中見つけ、終戦と同時に米国に持ち帰り、高

瀬さんの遺族に渡そうと機会を待っていたが、たまたま「はるかぜ」などの練習隊群の寄港を機にこの遺品を託したものだ。

「はるかぜ」は帰港後この遺品を厚生省引揚援護局未帰還調査部に依頼、遺族を捜していたところ、この程横須賀市安浦三の二一、小林アパート内無職高瀬ツルさん(七七)の長男善三郎さん(大正七年生)のものとなり、



十八日同市民生部から遺族に渡された。高瀬さんら家族は米ヶ浜二の十九に住み、善三郎さんは旧海軍工廠に勤務していたが、昭和十八年八月出征、其の後渡満牡丹江を経てブラウン島に転戦、翌十九年二月二十四日戦死している。ツルさんは現在長女ふみさん(三一)夫婦らと同居している。

高瀬ツルさんの話

二世の越水さんの親切で息子の遺品が戻ってきました。さっそくお礼の手紙を出して遺品を拾ってくださった時の模様を知らせてもらいたいと思っています。

◇ ◇ ◇

(上田文子さんのお話)

先日ブラウン座談会に出席させて頂きましてありがとうございます。

皆様のお話を伺わせていただき、私は何と幸せものかと存じました。

御覧いただきました兄の遺品が何時も身近にあり、困ったことがあると、つい「兄さん」と話かけてしまっています。六十三歳にもなってまだ甘ったれなんでしょうか。

遺品の腕時計は今も動いています。万年筆は使えます。私は時々「兄さん万年筆貸してネ」と云って使わせて貰っています。 — 中略 —

新聞記者が見えたとき、母は市役所の方からお聞きしたままをお話したと申しておりました。私は留守でした。

その後、越水様にお礼かたがたお尋ねしたところ、この遺品は越水様の隣のアメリカ人の青年が、軍属としてブラウン島に行った折拾ってきたもので、その青年のお母さんから「この日本人にも私のような母がいるだろうから何とかして渡してほしい」と頼まれたそうです。又その青年の名前や拾ったときのことには聞かないでほしいと云

われたそうです。 — 中略 —

十五歳の私に「文子お母様を頼むぞ」と、さっと拳手の礼をして列車の中に消えた兄の姿が五十年後の今なおまざまざと生きております。

国を信じ犠牲になられた大ぜいの皆様のおかげで、今日の日本があることを忘れてはならないと思っています。

お便りの中から

ブラウン 中村 順子

拜啓 このたびマール群島方面遺族会の慰霊祭に、そしてまた座談会に参加させて頂き有り難うございました。家の近くの佃様のお話で遺族会がある事を初めて知りましたのは、母の一周忌の少し前の事でした。

昭和十九年二月二十四日、マール諸島のブラウン島にて戦死という事は母から聞いて知っていましたが、私が三歳の時でしたので父の顔は写真でしか見た事がないので今迄は(決して良い事ではないのですが)心の片隅に父が居る様な存在でしたが、そのお話を聞いた時、不思議な気が致しました。佃様とは長い事、お目にかかっているのに、何故母の一周忌の前に…きつと何かの因縁で私を呼んでいる様に思いました。佃様は「英霊のお導きでしようね」と言われ、入会の手続きをして下さいました。(以下15頁へ)

ブラウン環礁の玉砕 (6)

矢野 雄 三

●第二の疑問符

何故に一艦一機の来援もなかったのか

米軍のマーシャル大反攻

マーシャル群島に対する米軍の進攻開始日「Dデー」は、二度にわたって延期され、最終的には一月三十一日と決定した。

それはまさに、中部太平洋上四〇万平方哩にまたがる広大なマーシャル群島海域を一挙に制圧しようとする壮大きわまる一大遠征作戦の、幕開けでもあった。過去二〇年にわたって日本が領有してきたこれらの島々は、いまや、巨大な米統合遠征軍の本格的な「総反攻」の前で、未曾有の物量攻勢に曝されようとしていた。

ギルバート作戦にはじまった「中部太平洋の進撃」は、戦争の歴史に類例をみないものであった。いかにして軍隊が敵の島嶼基地の点在する海洋を大きく跳び越えて横断前進し得るかについては、過去何らの手かりも得られなかった。

新しい攻撃の実行には、新たな訓練の方法、戦闘・支援・補給および整備の新たな技術、そして新兵器の完備な兵器庫を必要としたのである。にもかかわらず、真珠湾攻撃から二年足らずの一九四

三年秋を境にこの進撃が開始されたとき、準備はまさに完成しようとしていた。

それは、おそらく第二次世界大戦における最も顕著な偉業であった。(C・W・ニミッツ著『太平洋海戦史』より)

司令長官スプルーアンス中将の率いる「第五艦隊」は、五万四〇〇〇名の攻撃部隊(陸兵と海兵隊約半数ずつ)三万一〇〇〇名の駐留部隊——合計八万五〇〇〇名を輸送する二九七隻の艦艇群で構成され、これにミッチャー少将麾下の「第五八機動部隊」(大型空母六、軽空母六、高速戦艦八、巡洋艦六、駆逐艦三六、空母艦載機七五〇)を加えた巨大な艦隊群から成る。

攻略地上部隊だけでも、ギルバート占領時(二万七八〇〇名)を遙かに凌ぐ一大兵力を擁していた。

——もっとも、ニミッツのいわゆる「蛙跳び作戦」は当初、反対説に圧倒されていた。軍事的原則からいえば、爆撃機用の完成滑走路のある島を占拠するのが理に適うが、その点クエゼリン島には爆撃機用に十分な大きさの飛行場がなく、迅速にこれを構築するだ

けの時間もないと信じられており、大勢は、ウオッゼ・マロエラップ環礁を攻略目標とする意見に傾いていた。

この議論のカベがあっさり突き破ったのは、一枚の航空写真である。

十二月四日、クエゼリン島を襲った空母機が撮影したフィルムからは、同島南端にほぼ七〇%完成の爆撃機用滑走路が判読できた。——その空撮を入手するや、ニミッツ提督は、直ちに最終攻略計画に承認を与えた。

攻略第一日は、無防備であり、しかもその礁湖が移動補給部隊の艦船泊地に最適とみられる「マジュロ環礁」をまず占領、第二日は「クエゼリン島」の両端を同時に攻撃し、さらに洋上待機の子備部隊をもって、クエゼリン侵攻後、可及的速やかに「ブラウンの占領」に向かうというものであった。

それというの、マーシャル群島最西端の一つ手前に位置する「ブラウン環礁」が、カロリン群島、マリアナ群島、さらには首都東京への進撃に必要な米海軍および航空用臨時基地としての要素を、悉く備えていたからだ。

この作戦開始に先立って、スプルーアンスは、ニミッツが迂回することにしたマーシャル群島の各基地から飛来するわが航空部隊が、洋上に群がる広範な目標に多大の打撃を与えることに強い危機感を抱いており、上陸部隊がクエゼリン環礁に到達する前・後にかけて米空母機が、わが航空部隊の攻撃

意図を粉碎するよう周到に計画した。

——一月二十七日時点でマーシャル方面にあった可動日本軍機約一五〇が、米軍上陸開始前の三十一日には皆無となっていたことは、すでに述べた。

遠征軍当面の主目標となった「クエゼリン環礁」も、一月二十九日突如として襲いかかった米第五八機動部隊の猛爆撃によって、わずか一日足らずで孤立化し、付近一帯の制海・制空権は完全に敵手に帰した。三十日も航空機と艦艇による砲爆撃が終日反復され、その圧倒的な掩護の下に、米上陸部隊はわが方に全く妨害されることなく、上陸準備点に進入してきた。

三十一日には、ヒル少将指揮の一コ上陸戦闘大隊(第二七歩兵師団)約一六〇〇名が無防備のマジュロ環礁を占拠し、クエゼリン島攻略に向かうターナー少将指揮の第七歩兵師団二万二〇〇〇名、ルオット島をめざすコノリー少将の第四海兵師団二万一〇〇〇名が、それぞれ目標付近に到着。一部は主目標に隣接する小島に上陸して、上陸支援の砲兵陣地を構築した。

——古賀聯合艦隊司令長官は、三十一日〇六四五、「丙作戦第二法(マーシャル方面遊撃作戦)用意」を発令。南洋方面転進のため同日早朝トラックを出港してパラオに向かっていた敷島部隊(第二・第七・第十戦隊等)を急遽トラックに反転させるが、同一〇〇には、もはや積極作戦実施の可能性

なしとして、転進再開を下令した。

この時期、マーシャル方面のわが地上防備は、「第四艦隊」(司令長官・小林仁中将)麾下にある「第六根拠地隊」

(長・秋山門造少将)の第六十一、第六十六警備隊が、クエゼリン・ウオッゼ・ヤルト・マロエラップ・ブラウンなどに分散配置されており、増援の「海上機動第一旅団」も、一月中下旬各島の守備配置についてばかりで地上防備は固まっておらず、同方面の総兵力二万八〇〇〇名とはいえ、どの島も戦力の劣勢は免れなかった。

しかも、敵はクエゼリン攻略を企画する前にマーシャル群島東部に迫ると誤断した聯合艦隊司令部は、これら外方に位置する島嶼に防備強化のための人員・物資の供給を優先し、守備隊の一部をクエゼリンからミレ島に移したのに加え、数千名の援増部隊(南洋第一支隊ほか)を敵が「蛙跳び」に迂回したウオッゼ・マロエラップに配置するという、手痛いミスを買っていた。

クエゼリン環礁の「玉砕」

したがって、ニミッツが最初の攻略目標とした「ルオット」(ロイ・ナムール両島)には、クエゼリンに本部を置く「第六十一警備隊」ルオット分遣隊約四〇〇名のほか、「第二十四航空戦隊」(司令官・山田道行少将)の航空関係部隊一五〇〇名、第四施設派遣隊約八〇〇名、南東航空廠派遣隊約二

〇〇名、軍需部関係者約二〇〇名——合わせて約二九二〇名を数えるのみで、地上戦闘兵力はわずか、四〇〇名にすぎなかった。

米統合遠征軍は、一月三十一日以来連日にわたって熾烈な猛爆撃を加えた後、二月二日の夜明けとともに砲爆撃を再開し、爆撃を含む約六〇〇tを両島に浴びせ、前日隣接する小島に揚陸した砲兵大隊も、五〇〇〇発以上の砲弾を撃ち込んできた。

また、ルオットの南方四四哩にある環礁中最大の島「クエゼリン」には、「第六根拠地隊」司令官・秋山門造少将を総指揮官とし、海軍部隊は「第六十一警備隊」一五〇〇名を主力とする二七〇〇名、陸軍部隊は、阿蘇太郎吉大佐指揮の下に「海上機動第一旅団第二大隊」主力と南洋第一支隊の砲兵二〇中隊、合計約一二〇〇名が在島し、北地区は海軍、南地区は陸軍が各々防備の任に当たっていた。

遠征軍は、クエゼリン本島に対しても砲爆撃七〇〇〇発、エニブジ島に上陸した砲兵部隊の二万八〇〇〇発——タラワに投じた四倍量もの砲爆撃を浴びせ、さらに戦爆六〇機の空襲部隊が目標を選んで正確な爆撃を加えた。

艦砲射撃も情勢に応じて射程と弾道を変え、使用砲弾も通常弾から徹甲弾に変更するなどして、同島の固定施設の大半を破壊し、守備兵力の半数以上を殺戮するという徹底的な上陸事前攻

撃を敢行してきた。

★(注)さすがに戦前からマーシャル群島の海上・陸上防衛の中核と目されている要塞基地だけに、この玉砕戦での勇猛果敢なわが陸海将兵の奮戦は、米軍を大いに手こずらせたが、遂に「一艦一機」の来援もないままに、渾身の抵抗にもかかわらず、守備隊全員逃げ場のない「離島玉砕」へと追いつめられていくしかなかった。この玉砕戦の実相については、本誌「環礁」の創刊以来、すでに多くが語られ、問題の所在も解明し尽くされていることと思う。本稿では、あえてその重複を避け、先へ進めることにする。

米軍が「フロントロック(火打石)」作戦と名づけたこの戦闘で蒙った損害は、死傷者一七八〇名(うち死者九五、タラワでの損害の約二分の一)といわれ、また米軍によって埋葬された日本将兵の遺体は三四七二名を数えたという。戦死者の中には第六根拠地隊参謀の元皇族・侯爵音羽正彦大尉も含まれていた。

——大本営は、第四艦隊司令長官の詳細な報告を受け、二月二十五日、クエゼリンの玉砕を発表した。

●大本営発表(昭和十九年二月二十五日十六時)

「クエゼリン島」並ニ「ルオット島」を占領せし約四、五〇〇名の帝国陸海軍部隊は、一月三十日以降襲撃せる敵大機動部隊の熾烈なる砲爆撃下之と激戦を交へ二月一日敵約二ヶ師団の上陸を見るや之を邀撃し、勇戦奮闘敵に多大の損害を与えたる後二月六日最後の突撃を敢行、全員壮烈なる戦死を遂げたり
ルオット島守備指揮官は海軍少将山田

道行にして、クエゼリン島守備隊指揮官は海軍少将秋山門造なり、尚両島に於て軍属約二、〇〇〇名も亦守備部隊に協力奮戦し、全員その運命を共にせり

——そしてこの戦闘で、海上機動第一旅団第二大隊(長・阿蘇太郎吉大佐)主力(第三大隊第七中隊が配属)もまた、共に玉砕の運命をたどった。

クエゼリン本島南地区守備隊長の阿蘇大佐は、二月二日全兵力を指揮して夜襲を敢行、米上陸部隊をいったん水際付近まで撃退したが、米艦艇ならびにエニブジ島からの集中砲火を浴びて多大の損害を受け、攻撃は遂に挫折。

明けて三日は、飛行場東側地区の陣地攻防をめぐる彼我の激闘で死傷者が続出。零時過ぎから払暁までは、残存兵力による逆襲を反復したが、四日夜明けとともに、わが陣地は次第に敵戦車の轍下に蹂躪されていった。

同日一〇〇〇、阿蘇大佐指揮の下に米軍正面への果敢な突入を敢行したが、機銃掃射と砲火によってたちまち約半数を失い、最先頭を突撃した阿蘇大佐もまた、壮烈な戦死を遂げた。

『モリソン戦史』の著者は、この攻略作戦を次のように総括している。

大型空母群が、上陸作戦に如何なる協力を行ない得るかを真剣に実証したのは、この戦闘が初めてである。ギルバート戦における空母は、敵の攻撃機撃墜するためもっぱら防禦的に使用されたが、「高速空母」指揮官に新任された「航空生え抜き」のミッチャーは、空母を「攻撃任務」に使用することに精力を傾注し、

マーシャル戦においては、高速空母隊が上陸開始日までに作戦地域の敵航空兵力を全滅する如く計画された。(中略)

この一連の空中攻撃並びに基地隊機のミリ・ヤルト攻撃により、マーシャル群島の敵航空兵力は攻略軍の上陸に先立ち一掃され、完全な制空権を獲得した。初期の作戦に比べて最も顕著な事実は、

マーシャル作戦全期間を通じて、米軍艦船が一度も敵機の攻撃を受けなかったことである。(『モリソン戦史』より)

——この間、わが聯合艦隊は、遂にその姿を見せなかった。

想えば、日露戦争直後から日本海軍は片時も忘れず、このマーシャル群島方面で米艦隊と決戦する日を夢見てきたはずである。現に『敵主力艦隊の来攻時には、まずマーシャル群島にある多数の飛行基地群を利用して敵を邀撃し、その間に聯合艦隊主力がトラックからマーシャル海域へ出動して決戦を交える——』というのが、それまでの海軍側の主張であり、その『前方決戦構想』であったはずである。ギルバートは遠すぎたにしても、今度こそは、予期した『決戦場』ではなかったのか。しかるに、巨大な「米統合遠征軍」が、マーシャル群島の外郭諸島を素通りして、いきなり内懐のクエゼリンを急襲するや、またもやその「虚」を衝かれてしまった。敵艦隊邀撃の主戦力たるべき「第二十二・第二十四航空隊」(基地航空部隊)「第一百五十三航空隊」(水上機部隊)は、米軍のマーシャル大反攻を前にアッという間に一撃で

壊滅し、また、決戦戦力となるべき虎の子の「母艦兵力」も、すべて絶望的なラバウル最後の航空戦に注ぎ込んで虚しく消耗させてしまっていた。

いかに聯合艦隊とはいえ、一隻の空母もなくては、『決戦』の仕様がな

聯合艦隊固有の決戦戦力は、開戦以来最悪の状態を迎えていた。——なぜ、あれほどまでに「マーシャル決戦」を呼号しながら、こうも後手後手に回らざるを得なかったのか。

すでにトラックは、米軍が占領済みのブーゲンビル島と新たに手に入れたクエゼリン基地の双方からの爆撃圏内に置かれ、またトラックへの海上補給線は常に米潜の攻撃に曝されていた。聯合艦隊にとって、トラックは、もはや安全な根拠地ではなくなっていた。古賀長官も、戦線をマーシャル方面から「父島、マリアナ群島、西カロリン群島、西部ニューギニア」の一線に後退させる意思を固めており、これを「死守防衛線」と呼称した。そしてクエゼリン失陥の結果、トラックが米遠征軍に対して大きく暴露される、その鋒先がやがてトラックに向けられると判断。二月四日ブーゲンビル島から飛来したB24一機がトラック泊地を偵察し、停泊中の多数のわが艦艇群を認めたこと知るや、同月六日トラック聯合艦隊主力の後退を部署し、水上部隊主力のパラオ転進を下令、自らも旗艦「武蔵」「大淀」などを率い

て二月十日トラック発、軍令部との作戦連絡のため東京湾へ向かった。

トラック泊地には、現地海軍部隊と泊地の貨物船を防衛するため、わずかに二隻の軽巡と八隻の駆逐艦を残しただけである。

——果たせるかな、その一週間後、トラックは敵大機動部隊の不意打ちを受け、聯合艦隊があれほど執拗に主張し続けた——マーシャル海域での「Z作戦」は、遂に発動されることなく終わるのである。

そもそも日本海軍は、トラック基地の安泰を図るために、開戦直後ラバウルに進出した。ラバウルの攻防をめぐる激しいソロモン消耗戦も、結局はトラックを護るためのものであった。そのトラックを一戦も交えずして退いたことは、海軍全体の士気低下に拍車をかけ、海軍中央部も、相次ぐ敗戦の事実士気の阻喪を免れなかった。

陸軍側の不信感も、頂点に達した。二月十三日付の『大本営機密日誌』には、次のように記されている。

松谷大佐ガ海軍側カラ得タル印象ニ依レバ、海軍部内ニハ戦争ノ前途ニ悲観多ク、何等カノ機会ニ妥協和平ヲ企図セントスル空気充滿シタルガ如シ。重臣層ニ於テモ大部ハ右海軍部内ノ空気濃厚ニシテ、兩者接近シテ戦争阻害抗力タルヲ算ニ抗シテツ。今ニ於テハ意志薄弱ノ徒ヲ驅使シテ邁進スルコトヲ得ザランコトヲ十分意識シ置クヲ必要トス

「不覚」のトラック大突襲

クエゼリン攻略作戦の間、洋上に待機していた遠征軍予備兵力は、二月二日直ちにブラウン派遣グループに編成され、ブラウン攻略の任務についた。

だが、同環礁の南西六六〇哩には絶対国防圏の突端を占めるわが要衝「トラック」がある。軍国側が「日本の真珠湾」「太平洋のジブラルタル」と呼んだ太平洋上、日本海軍最大の根拠地である。これほどの近接地に強力なわが聯合艦隊が居座っていることは、ブラウン進攻部隊にとって重大な脅威であった。——加えて、スプルーアンスのもう一つの懸念は、「ブラウン環礁」についての最新情報にあった。同環礁に進出した増援部隊「海上機動第一旅団」主力が早急に陣地構築を進め、防備をいっそう強化する前にこれを叩かなければ、犠牲は予想を越えて増大する。トラック急襲は、ブラウン進攻にとって不可欠の作戦行動であった。

クエゼリン攻略が迅速に進捗したため、統合参謀本部は二月三日、ヒル少将の指揮下にあつてまだ輸送船に乗ったままの予備隊九三〇〇名(海兵一コ連隊と歩兵第二七師団の上陸専門二コ大隊)いずれもマジロ占領には参加せず)をもつて、可及的速やかに「ブラウン環礁」の占領に向かうことを決定した。

また、その間、敵航空部隊もしくは艦隊による妨害を防ぐため、第五八機動部隊は、ブラウン環礁に対する上陸作戦支援と同時に、同環礁の上陸攻撃部隊を擁

護するため、同環礁の西南方六六〇哩にある日本海軍の誇る「トラック要塞」に對しても、敢えて一撃を加えることにした。（『モリソン戦史』より）

すなわち、九隻の空母と戦艦六隻を従えたスプルーアンスの攻撃部隊が、まずトラックを叩き、返す刀で孤立化したブラウン環礁を一気に奪取する。ミッチャー指揮の機動部隊は二手に分かれ、空母群一コは、同環礁付近に留まってブラウン攻略の直接支援に当たり、他の三コ空母群はトラック攻撃に向けて出動した。

二月十五日、横須賀に到着した古賀長官は、直ちに軍令部との「戦備打合せ」に臨んだが、時すでに遅く、ミッチャー指揮下の第五八機動部隊（大型空母五、軽空母四、戦艦六、重巡五、軽巡五、駆逐艦二八、潜水艦一〇）が二月十二日メジュロ環礁を発し、一路トラック要塞に迫りつつあった。接近は隠密裡に進められ、トラックでは全くこれに気付いていなかった。

聯合艦隊が、トラックから姿を消して以後、同地区の最高指揮官は元どおり先任の第四艦隊司令長官・小林 仁中将となったが、この時期のトラック基地には第四艦隊のほか南西方面艦隊所屬の航空部隊、訓練中の南東方面所屬の航空兵力、陸軍第五十二師団主力など……が雑居、統一指揮官のいない各種各様の混成集団が、まさにばらばらに存在していた。

部署を発令し、指揮系統を明確にして有事即応の態勢ができていてこそ、戦いが可能なものにもかかわらず、この複雑な指揮系統の中にあつてなお、いまだに敵を迎え撃つための部署の発令がなされていなかった。また基地内の航空機は、雑多な部隊から集めた一四三機があるものの、実動機数は七四。ほかに東京方面に輸送する補充機一三五機が格納庫内にあつたにすぎない。

二月十五日、基地から哨戒に出た陸攻六、艦攻三機のうち陸攻二機が還らず、また同日一三〇〇には、無線傍受班が米空母エセックスの電話通信をキヤッチするが、その報告が小林司令長官の手許に届いたのは、二一〇〇頃だったという。

小林中将は、翌十六日早朝から敵空襲の算大なりと判断し、十六日〇三〇〇以降トラック方面「第一警戒配備」を下令、その後も索敵を実施したが敵状が得られぬため、同日一〇三〇「第三警戒配備」に復した。

その日の午後には、兵員に外出許可を与え、自らも美しいサンゴ礁での釣りを楽しんでいたという。

——已んぬる哉、翌二月十七日〇四五五、米空母から発進した攻撃第一波七〇機が突如、無防備のトラック基地に殺到した。

基地リーダーは米機来襲の三〇分前にその機影を捉え、〇五〇〇には戦闘機が発進邀撃したが、第三警戒配備に

復していた即応態勢の不備と、部隊混在のままの指揮不如意とを衝かれて邀撃成果は挙がらず、わが対空陣地もたちまちにして戦闘不能に陥った。

同日早朝、基地を発進した索敵機が〇六〇五、トラックの四五度九〇哩に空母二隻、輸送船五隻を従えた米機動部隊を発見報告するが、時すでに「トラック大空襲」の火ブタは切つて落とされており、同日一七〇〇までに九次にわたる延べ約四五〇機の来襲を受け、一八〇〇には可動七四機もわずか、六機を残すのみとなった。

翌十八日も、〇二四五から〇九〇〇まで四次にわたつて延べ約一〇〇〇機が来襲、泊地内の艦船を主目標に一斉攻撃を加えた。米空母機は思うままにトラック上空を乱舞し、逃げまどう艦船をシラミ潰しに沈没させた。

その間、戦艦「ニュージャーシー」に坐乗したスプルーアンスも、自らトラック島を右回りに一巡し、軽巡一、駆逐艦一、小型艦艇数隻を撃沈する。

——この二日間の空襲で撃破された航空機は一八〇機、軽巡「那珂」をはじめ艦艇九、輸送船三四が撃沈、艦艇九大破の甚大な損害を蒙った。基地機能は完全に麻痺し、トラックの戦略価値は無に帰したといつていい。

米側が大々的に報じたように、まさしく「真珠湾の報復」であった。その完璧な奇襲作戦にわが方は何ら有効な反撃を加え得なかっただけでなく、自

らの防禦すらなし得なかったのである。かかる事態に陥ろうとは、歴代軍令部総長や参謀たちの誰れが予測し得たであろう。

この奇襲のさなか、当初予定のブラウン進出を断念してトラック基地に待機中だった海軍の「第六十八警備隊」（司令青山英夫中佐以下六二一九名も、敵空母機の攻撃を受けて乗船中の愛国丸が沈没、青山司令ほか一部将兵が戦死したことは、すでにのべた。

そして、この時期、たまたま二月十三日東京を出発した陸軍の秦参謀次長、服部卓四郎作戦部長、瀬島龍三作戦参謀の一行が、ラバウル行き飛行便を待っていた。——そのまさに目の前で、生々しくも繰り広げられたあの「トラック神話」の崩壊を、いかなる思いで味わったのであろうか。

一行はラバウル行きを中止し、サイパン經由急ぎ帰京の途につくが……とわりわけ瀬島参謀にとっては、自らの発想から生まれた陸軍編制史上初の「海上機動第一旅団」将兵たちが、わずか数週間前、満州から南海の離島「ブラウン」へ送り込まれたばかりだった。

彼らが、そこから西南わずか六六〇哩彼方の洋上に全く孤立して取り残され、早くも十八日には「一艦一機」の来援もない中で、米巨大遠征軍の怒濤の進攻に曝されていくことに、いかなる想いを馳せていたのであろうか。

（以下次号）

●島別座談会シリーズ(第一回)

ブ
ラ
ウ
ン
環
礎
座
談
会

日時／平成三年四月二十八日(日)午後一時開始
場所／東京都勤労福祉会館

参加者
座談会(順不同敬略)

新保 晃(長岡)・六戸 獻吉郎(横須賀)・上田 文子(同)
谷 達也(横浜)・田中 猛(稻城)・矢野 雄三(田無)
中村 順子(世田谷)・坂本 美枝子(同)・小池 勇二(同)
中田 テル(渋谷)・荒木 常子(目黒)・遠藤 安雄(大田)
間々 田やす(豊島)・田島 知恵子(同)
佐藤 宗丕(会長)・秋本 英郎(常任幹事)



ブラウン環礎が「第一回座談会」に選ばれたのは、『戦時中、この環礎玉砕についての大本営発表がなく、戦後は米軍の原水爆実験場となったため慰霊団が入れず、慰霊碑もなく、訪島者も少ないという特異な現実を踏まえて……』(佐藤宗丕会長の冒頭の挨拶)のことだが、それらの歴史的事実の累積がもたらした荷重は、想像をはるかに超えたものだったといっている。

そのことは、この「座談会」にも如実に表われていた。何かを語り合う以前に、まず事実関係そのものが前面に大きく打ち出され、座談会というよりはむしろ、質疑応答の色合いが濃くなるを得なかったように思う。それほど、ブラウン環礎に玉砕した将兵たちの真相は、いまだに闇に包まれた多くのものを残している。

現に、マーシャル遺族会の永年の調査にもかかわらず、この環礎守備隊の最高指揮官であった西田祥實陸軍少将(当時)の遺族の消息が、昭和も最後の年(六十三年二月まで全く不明であったことなども、そうした灰色の現実を象徴する一つの典型的な事例といっている。その意味では、若干時期尚早の感なきにしもあらずの「座談会」となった。進行役として、敢えてその「位置づけ」を試みていることにする。(矢野雄三)

真相は——
何も知らされていなかった

——まず驚いたのは、戦後すでに四年も経過しているというのに、遺族の中には、玉砕された肉親の南方派遣時の状況はおろか、その所属部隊名さえ明らかでない方々が、意外に多いという現実である。

その最大の原因は、玉砕発表を異例に「差し止め」た大本営上層部による事実の隠蔽にあったといっている。

因みに、富永謙吾著『大本営発表の真相』には、以下の記述がある。

『米軍反攻後の上陸作戦のうち、大本営発表で取りあげられないものが一回回ある。その理由は、別に取りあげる必要をみとめないほど小さいものであったからである。ただし、例外がある。グリーン島(筆者注・同年二月十五日玉砕)とエニウエトクの玉砕である。(中略)』

エニウエトク守備隊は、指揮官青山英夫海軍大佐、兵力三四〇〇名。グリーン島守備隊は、和田久馬海軍大尉以下約一〇〇名であった。(傍線筆者)

当日の発言の中にも——

①ある時期突然に文通が杜絶えた、②戦地から最後の便りはあったが、発信地も部隊名(略号のため)も不明のままだった、③在満時の最後の所在地は分かっていた、④ある日突然「戦死公報」によって南方での戦死(玉砕の事実でなく)を知った、⑤慰霊祭で初めて「ブラウン」

と聞かされた、⑥お寺のひな壇に一列に並んだ位牌をまるでボールでも受け取るように「ハイ、ハイ」と次々に手渡された……等々。情報過多の日本の現状からみれば、戦時下とはいえ、まさに想像を絶する「知る権利」の抹殺があったといわなければならない。

大本営発表の差し止めと、その情報秘匿の痛ましい爪跡は、発言の随所にまだ生々しく残されている。上記引用文の「傍線部分」に見られるブラウン守備隊に対する誤認(何故なら、米軍来襲時、青山部隊は同環礎には実在しなかった)と全く同様の誤りを、大方の戦史・戦記類が戦後長期にわたって踏襲してきたことも、事態を一層混沌に導いてきたことは否定できない。

今でも戦没当時に本籍があった県庁所在地の福祉局援護課に照会すれば、陸軍には「戦時名簿」海軍には「履歴原簿」が保存されている(秋本英郎常任幹事)そうだが、遺族の細部の疑問に答えてくれることを望むほうが無理というものだろう。特別のプロジェクトでも組んで、徹底的に洗い出さない限り、その多くが永遠に闇の中に葬り去られていくしかないだろう。

——とはいえ、会場に持参された故人からの愛情溢れる書簡類の数々や、あるアメリカ人の好意で遺族の手に返ってきた貴重な「遺品」(本誌に別項として掲載)などは、思わぬ収穫であったといっている。

——第二の問題は、圧倒的な敵戦力を前にして果敢な玉砕戦を戦ったそれぞれの肉親が、ブラウン環礁内の三つの島(エンチャビ、メリレン、エニウエトク)の果たしてどの島で戦死されたのか——という点である。いまなお未確認のまま放置されているケースが、いかに多いことか。

——六十年に日本遺族会主催の現地慰霊に参加したが、遺族会で調べてもらった「ブラウンであろうが、確証はない」と言われた。例えば私の弟は機関砲隊だったが、メリレンとエンチャビに分かれていたようだ。「将校は別だが、兵隊はどこの島か確証はない」と言われた。

確かに、どの部隊が最終的に何処にいたかは必ずしも明確ではなかった。というのも、満州から中部太平洋に派遣された「海上機動第一旅団」は、途中一旦下船したトラック島で大幅な編制替えが行なわれ、機動旅団主力はブラウン環礁へ、機動第二大隊主力および他の二コ中隊はクエゼリンをはじめ、ウオッセ、マロエラップ環礁へ分遣されていく。

この時期、何故に編制の手直しが必要だったのかは理解に苦しむところだが、そのことが、一部の将校も含めて実態把握を一層むずかしくする一因となっているのは否めない。——例えば部隊略号は「駆三一三三」(機動第三大隊)であっても、実際の守備位置はエンチャビ島、メリレン島から、遠くは東南三六〇哩のクエゼリン(同大隊

第七中隊)にまで及んでいる。

——また、玉砕した肉親の祥月命日が、正しくは何月何日に当たるのかという点でも、真相のカベは永らく閉ざされたままだった。

出席者も言うように、当時の戦死公報は、ブラウン環礁での戦死日を一

「二月二十四日」と記載しているが、実際には、トラック要塞の奇襲に成功した米巨大遠征軍が二月十八日早朝、まず環礁中唯一の滑走路をもつエンチャビ島に大挙して襲いかかり、翌十九日一三時四〇分、攻略部隊指揮官ワトソン准将がエンチャビ占領を宣言しているし、エニウエトクの占領宣言は二十三日一六時三〇分となっている。(防衛庁公刊戦史・四二年七月初版)

戦後十数年も経ってやっと公式に明らかになった史実であるが、これとも、三〇〇〇以上に及ぶ遺族のどれだけが知り得ていることだろうか。

巨大な——

原水爆実験の障壁

しかも、この環礁の戦後を知る上で最大の障壁となったのは、全島玉砕に続いて同環礁がたどった「教奇な」運命による。

ブラウン環礁占領後は、米軍常用の「エニウエトク環礁」が一般的呼称となり、日本側の呼び名だった「ブラウ

ン環礁」は戦後、世界地図からも抹消され、知る人のみぞ知る「幻の環礁」となってしまう。しかも、その「エニウエトク」は戦後間もなく、同じマーシャル群島内の「ビキニ環礁」とともに、米軍の新たな「核実験場」に指定されていく。

ビキニの名は、マグロはえ縄船「第五福竜丸」の被爆と、いわゆる「原爆マグロ」事件で多くの日本人の記憶に残っているが、「エニウエトク」がビキニを上回る原水爆実験の場であったことを知る人は、決して多くはない。

終戦の翌年から三十三年にかけて、この二つの環礁では合計六六回もの核実験が行なわれたが、ビキニの二三回(水爆二回)に対し、エニウエトクは実に四三回(水爆三回)を数える。

主として環礁北部の島々が実験場となり、エンチャビ島はその中心的役割を担わされたが、その結果、地上実験三回、近くの島での実験七回——計一〇回の核爆発があり、三コの水素爆弾もすべてこの島のすぐ西方で炸裂した。

一九五二年十一月一日、世界初の水素爆弾(広島型原爆の八〇〇倍の威力をもつ)は、エンチャビ島民の海鳥と卵の捕獲地・エルゲラップ島に仕掛けられ、巨大な核爆発で同島は一瞬にして跡形もなく消し飛んだという。

そして、環礁全体を覆ったその驚異的な量の放射能汚染が、永らく国自体による現地慰霊団派遣の大きな障壁と

なり続けてきたことは、確かだ。

——六十年の現地慰霊(日本遺族会)に参加の際、チャーター機故障のため一週間待たされたが、遂にブラウン(エニウエトク島)に降り立つことができた。

美しいマジクロと違い、椰子の成育も悪い殺風景な荒地に暗い気持ちで祭壇を設け、御霊たちにお詫びをし、「冥福を祈った。同行した山村さんのおかげで予定外のメリレン島も巡拝させていただけなのは、望外の幸であった。

昭和五十三年九月、初めて米軍の大規模な放射能除去作戦を現地に取材した新聞報道によれば、「クリーン作戦のために掘ったあれだけ深い穴のどこにも、日本兵の遺骨は発見されなかった」とあるが、われわれ遺族としては、「クエゼリン環礁の場合(米軍は立派に埋葬してくれていた)佐藤会長」と同様、ブラウン占領後の米軍もまた彼らに相応しいやり方で、遺体の処理に当たってくれたものと期待したい。

——それだけに、エンチャビ島を含めた全環礁への早期の慰霊が待ち望まれるが、幸い、来年初頭には厚生省主催の慰霊巡拝(ブラウンを含む)が、ようやく実現の見通しにあるという。

実際に現地の土を踏み、住民たちとの会話のチャンスをもつことで、遺骨問題も含めた灰色の部分、次第に明らかになっていくに違いない。

この慰霊巡拝後に開かれる「ブラウン座談会」こそは、きっと新しい何かを遺族に提供してくれることだろう。

(8頁より)

四月七日の慰霊祭には、佶様とご一緒させて頂き靖国神社へ。これから始まる事はすべて初めての事、緊張する気持ちの中、本殿へ一歩一歩向かい出た途端、胸がいっぱいになり涙で神主様のなさっている事が見ていられなくなりました。そして最後の音楽が流れた時、今度はもの悲しくなり戦争は二度としてはならないと思

いました。私は兄二人妹一人の四人きょうだいでしたが、昔は結核が一番怖い病気とかで若い二人の兄は病死、妹も十一歳の時に病気で亡くなり、残された父一人が元気でおりましたところ、今度はその父が戦死という事情で、私がある心のついた時には祖母、母、私の三人家族でした。この為、詳しい事はあまり分りませんでしたので、四月二十八日の「ブラウン座談会」にも出席させて頂き、いろいろな方のお話を伺いながら、そういう事もあったのかと、私の知らないお話ばかりで本当に良かったと思っております。

その時、矢野雄三様から三ヶ根山の慰霊碑への道順を教えてくださいましたので、現在私の家族は主人、子供二人の四人家族ですが、出来れば揃って御参りに行きたいと思っております。一つ写真の父の面影を偲びながら痕跡をたどり、御参りに出掛けられたら本

当に嬉しく思います。佶様には何かから何までお世話になり本当に有り難うございました。会長さまはじめ皆様にご利用からもお世話になると思います。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

会友 井上 義夫

新緑の候、ご清栄の事と存じます。お世話になっております。

一、五月十七日、佐世保海軍墓地にて恒例の市主催の合同慰霊祭(佐鎮十七万と当会の英霊)が催されました。官民一千五百人、海上自衛隊の總監、儀仗隊も参加。この時佐世保在住のルオット、クエゼリン戦没者の遺族八人(本协会会员)と、私がお世話を致しまして初めての顔合せと懇談の場を設けました。七十歳と八十五歳の未亡人の方、義姉の方、妹さん方に準備した資料と、私が頂いていた島の霊砂を御渡しして、今まで同じ境遇の方なのに同じ佐世保に住みながら横の連絡がなかった様でした。

これでご顔を覚えられ、それぞれの思いをお互いに話されて、ああ良かった。力が出た、楽しくなると、皆さん大変喜んで下さいました。

二、この日、たまたま鹿兒島から何も知らないで遠路お詣りに此処、海軍墓地にいられた御婦人が、私の下げていた「クエゼリン遺族会」のタレ幕を見て名乗り出られ「マーシャル方面遺族会に入会したいので手続き

を御願したい」との事です。年会費二千円を預かりました。同封しますのでよろしくお願致します。上記の懇談会に加わって涙を浮かべて喜んで帰られました。

氏名 山田フジエ様(戦没者の令妹)

〒 八九五-〇二

住所 鹿兒島県川内市城上町七六三五

電話 〇九九六-三〇〇-一七五二番

戦没者 山田 弘様

戦没地 クエゼリン

所属部隊名 六根司

日付変更線について

蓮尾 諭吉

地球上の時刻を決めるため、ロンドン市内の東部にあるグリニジ天文台跡を通る子午線(経線ともいう)を経度の零度とし、太陽がこの子午線を南中する時刻をグリニジの午前十二時とする。なお、一日は真夜中から始まり、真夜中に終る。このようにして決めたグリニジにおける時刻を総標準時とい

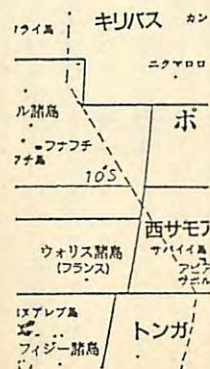
い、各地の地方標準時はその地点を含む地区の中にある点を選んで、そこを通る子午線に基づいて定める。日本の場合は兵庫県明石市を通る東経一三五度の子午線を基準とする時刻を日本の標準時としている。日本の標準時はグリニジ標準時より九時間早い。これは地球が自転しているため、経度十五度ごとに一時間の時刻の遅速があり、西へ行くほど遅れ、東へ行くほど進む

からである。

このようにして経度一八〇度附近では、遅れた時刻を使う地域と進んだ時刻を使う地域で日付がちょうど一日ずれることになる。この二つの地域の境界線すなわち一八〇度の子午線を日付変更線とすることが国際的に決められている。ただし場所によっては、地域的な都合で一八〇度の線と一致しない部分もある。それは北緯四一度以北ではベーリング海峡とアリューシャン列島の西端を通る線と南緯一五度以南ではツバル諸島、トンガ諸島の東を通り西経一七三度の子午線につながる線である。日付変更線を日本側からアメリカ側に越えるときには日付を一日遅らせ、逆の方向に越えるときには一日進めなければならぬ。

マーシャル諸島のクエゼリン島その他アメリカ軍が基地として使用しているところでは、ハワイ諸島と同じ日付を使っているようである。

(正誤訂正)環礁54号5頁の付図のうち、ツバル諸島以南の日付変更線に誤りがありましたので次のとおり訂正します。



北満からマーシャルへ (3)

Ⅱ 或る陸軍部隊の苦闘

秋元輝夫

聯合艦隊の糧秣補給不成功

聯合艦隊司令部に於いても、潜水艦によるマーシャル群島方面に対し糧秣輸送を指令、ウオッセ島にも、昭和十九年三月下旬、潜水艦「伊三十二潜」が糧秣の輸送を試みたが不成功に終わってしまったと聞く。

結局十九年四月頃から警備隊より定量米麦の給与を受ける事が困難となり、自活に頼らねばならなくなった。

そこで部隊は兵員の体力消耗を極力防ぐと共に、農園の開墾や離島の椰子の実採取、内海での漁労などによる現地自活態勢に入らざるを得なくなつた。ウオッセ島に於ける貯蔵糧秣の僅少にともない、警備隊司令官はこの時期各部隊にたいし農耕自活の方針を明示された。

この時点より戦士達の大部分は空腹を克服するため、朝早くから海岸に出て砂浜を歩き小さなカニや貝を漁り、島に自生する雑草や木の葉を集め「雑炊」を作り、米麦の代替えとしなければならなかつた。

野戦陣地の生活

昭和十九年一月末から始まつた米軍のマーシャル群島進攻作戦に伴い、連日米軍の艦砲射撃、銃爆撃によりウオッセ島の建物も、椰子の林も、ほとん

どが破壊され瓦レキの山と変り、今迄の偽装した防御陣地もすっかり地肌を出してしまつた。我々の野戦陣地は資材の不足と上陸して間もない米軍の攻撃の為、思うような陣地も作れずその上、砂地を五、六十センチ掘り下げれば海水が出てしまひ「それより下はサンゴ礁の岩盤で掘れず」結局椰子の丸太を組み合わせ掩体を作るくらいで、深い防空壕など望めず、敵の艦砲、銃爆撃には只身を隠す位であつた。その上連日の破裂弾の振動で壕の土砂が崩れ落ち、補修するのが日課のようであつた。

十九年六月以降の野戦陣地に於ける戦士達の生活は、各自支給の兵器、弾薬の整備に重点を置き訓練を一時中止し体力の消耗を極力防ぎ、専ら休養に努め各自の体力に合せた現地自活を計ることとした。即ち農耕班、魚労班、椰子班をつくり戦士達の適材を生かし農耕班員(主として農家出身者)は専ら南瓜、トウモロコシ等の栽培に、早朝より起きだし畑の手入れ、人工交配等に精を出し、南瓜は種を蒔き、蔓が出て花が咲き、収穫まで約三ヶ月を要した。戦士達は毎朝南瓜の成長を楽しみながら頑張つた。島は比較的风が強くトウモロコシの実の付きが風下のみ

になつてしまふ事が多かつた。魚労班員(水泳の達者な者)は爆薬と缶詰の空き缶でハッパを作り、敵の銃爆撃の合間を見て朝から晩まで海に潜り魚の獲得に努める。火薬が不足すると、危険を冒し米軍の投下した不発弾の信管を取り除き、火薬を抜き取り爆薬として使つた。椰子班は海の引き潮を見計らい遠く離島まで出向き、上空よりの攻撃を避けながら椰子の実を採取し、戦士達が偽装網で作つた網に入れ、潮流の激しい海を渡つて持ち帰る。これは体力を相当必要とするので後日中止する。

この様な努力を続け乍ら食糧の確保に努めたが、戦士達の体力の消耗を満身に補う事は難しく、特に十九年十一月から翌年三月頃迄は乾燥期となり、植物の成育もならず漁労の成果も少なく、この間が一番食糧補給に苦勞した時期でもあつた。

我々は、島に生息する生き物を総て捕り、食用にしたと申しても過言ではない。野鼠など型は小さいが貴重な蛋白源の補給に役立つた。食べられる物はなんでも食べた。野生になつた鶏、猫、果てはトカゲ、コウロギ、トンボまで捕り一匹ずつ針金に通し塩水に付け焼いて食べる。又空腹を満足させるため、魚に木の葉を加えて満腹感を得た。これは余り栄養の補給にはならなかつた。

爆撃で倒された椰子の若芽が柔らか

く、竹の子に似て甘く味が良かったので、爆撃が始まり椰子の木が倒れると戦士達は我れ先に取りついて、生で食べあつた。遂にはトウモロコシの新芽、果ては野生する草(内地で言うペン草)まで生で食べ、飢えを凌ぐ始末であつた。食べ物に対する極限の生活の連続であつた。

野生のマゴモックと言う内地の馬鈴薯に似た芋状の球根を掘り起こし、それより澱粉を取り、椰子の実のコブラ(石鹼の材料)を粉にし、魚粉を混ぜダンゴ状にし塩味で煮上げる。これは当時最高の料理と言われていた。

この間部隊は本島を防備しながら警備隊から割り当てられた環礁内の無人の離島に、兵力の一部を派遣し島の警備と管理とを合わせて食糧の獲得に努めた。

即ち十九年六月部隊の各隊を南地区に配備を変更、編成替を行つと共に、畔柳曹長(後、准尉)を長とする兵力をウオッセ本島南側二ツ目の無名離島に、その後安藤軍曹、菊地平八兵長以下の兵力に、施設部要員四十余名をエネチャルダク島に派遣離島管理と食糧増産に努めさせる。次に横山曹長(後、准尉)加藤軍曹以下の兵力に、施設部要員を加えウオッセ島隣接無名離島の管理を命じ、夫々離島に於いて食糧の増産に努めさせた。

(以下次号)

島は八百マーシャル群島(2)

生憎大酋長は外出していて会えなかった。その妻君と第二第三夫人に会ったが、どれも話が通じないので酋長らしい漫画を書いて、晩また訪ねてくると云う意味の絵を画いたらようやく分ったと見えて三人の女は云い合せしように大声で笑いこけた。

このライラン君は数というものを知らないし勿論字も読めない。本人は一体どの位収入があるのかはつきり分っていないということだ。その後私は道でこのライラン君に会ったのだが、一見何処となく抜けているような気がして、ふけば飛ぶような貧弱な男であったのがっかりした。

部落の組織が共産制だと云うその代表的なものはこの大酋長の生活を見れば分る。年収四万から五万もあるのにピーピーカラカラと云うは、カナカ遠は他人の家へ行って食事をすることを殊の外喜ぶのだ。だからわれもわれもと酋長の家へ押しかけてコブラが売れた後などはライランの家の周りには毎日人が押しかけては、米を貰いに出かける。多いときには一日南京米が三十俵近く喰い潰されたという嘘のような話がある。それが五十哩も百哩も離れている遠い島からわざわざライランの家へ米を貰いにやって来るのだ。これを島の言葉ではカッピヨリ、マガイと云

っている。日本語に訳すと「飯貰い」とでもいうのであろうか——。

この島は全体がグリーンで出来ているので、やはり野菜は一つも出来ない。それは群島中でも野菜の全く出来ないというのはこの島だけだ。全部石を粉に砕いたものばかりなので野菜を作るのに遠くポナペからメリケン袋に土を入れて高く船賃を払い持つてくる。島へ来ると一俵七十銭につくということであった。野菜が欲しいと云って嘆くのは日本人ばかりで、島民たちはパイヤやパンの実を常食としているので、野菜などの必要がない。日本人の体は俺たちと違うのかなどと云って不思議がっているということだ。私は島へ上陸して翌日の午後支庁主催のマーシャルの歓迎踊りを見せて貰った。なんでも十七年振りで踊りがあるというのであった。どうしてここの島民だけが踊らないのかと訊くと、やはり教会が喧ましくて踊らせないのだと云う。

支庁と教会とがすったもんだ採めた揚句やつとこのことで踊らせることにしたのだが、島民たちは踊りたくて、むずむずしているのだから踊ってもよいという布令が出たときなどは島民たちの喜びは一方でなかったという。それも一行の歓迎踊りの練習と云う条件つきのもので、のべつまくなしに踊って

いいというものではない。公学校の横広場が舞踏場に当てられた。この日の踊りに参加するため二百哩から三百哩の海を越えて二十人三十人と一団となつて参加した。その踊る服装から総てが島々に依つて異なるので、なかなか見事なものであった。最初は島民中年男たちの蹴マリ踊だった。藤原時代に殿上人がやったと思われる悠長なもので足の使いかたなどはさながら両手の如く実に鮮やかなものであった。

踊りは十種ほどあつてどれもこれも見事なものであった。殊に島の若い男が踊った体育ダンスのような踊りは宛らサーカスショーでも観るような気がして、そのテクニクなども、巧みなものである。総勢七十人、男は全部白のシャツに白ズボンに白の運動靴、女は薄桃色の長い筒単服を着て、パンジョウやウクレレに合せてチャッチャッと踊る足つきなどを見ていると大レビニュー団を思わせるようだ。多分英領ギルバートあたりから移入された踊りなのであろう。

この体育ダンスが終ると島の名物ガングン踊りが始まった。これも総勢七十人位はいたろう。石油缶の蓋を抜いてそれに棒を挟みその棒を左手に握り、右手に小さな叩き棒をもって、リーダーの唄と調子に合せてガガングンと一斉に叩くのだ。自由自在に缶を使いこなす、そのテクニクは実に見事なもので、立派な一つの舞踊芸であ

った。更に棒踊りから、戦勝踊りと云う順序で次から次ぎへと続けられ、どれもこれも今まで見た踊りとは全く異なり、とても上品で見ている方で胸がすくようなものばかりで、最後の六段踊りなどは何処へ出しても恥しくないと思う鮮やかなものであった。

この六段踊りの参加人員は総勢約五百人、桃色の服を着た女が二百人程地に座つて缶を叩くとその後一段と高いところに模様を施した奇麗な権をもつた男が三百人程、手をパチパチと鳴らしながら一様に踊るのだ。これもやはり戦勝踊だというのだ。どれもこれも立派な舞踊で、何一つ風紀上悪いと思ふようなものは殆どなかった。なんの娯楽もたない島民たちにせめてこの踊り位は一定の期間をつけてやらせてもよさそうなものなのに折角の素晴らしい舞踊芸術も禁制を喰らいだんだん忘れられてゆくと云うのであった。

私はこの踊りを見て、マーシャル踊りだけでもせめて島に残して置きたいと思つたことである。船はこの島に二日碇泊して再び元のコースを辿つて日本へ向つた。——赤道直下のマーシャル群島——私は思う存分マーシャルの気分を味つて再び船の人となった。

▲本稿は、南洋群島協会より贈られた「南洋紀行・赤道を背にして」の著者故能仲文夫氏が昭和八年五月から三ヶ月余をかけて、南洋の島々を尋ねた紀行文の一部です。▽

慰霊祭参列者芳名

(敬称略、順不同)

今年四月七日(日)の慰霊祭に次の皆様が参列されました。参列しても受付に申し出のなかった方は載せてありません。参列された方は一七二名ですが、氏名の分からない方が四名ありました。

- 青森県 小笠原 廣 小笠原きぬ
- 宮城県 高橋とし子 松木 孝子
- 秋田県 奥山 キノ 加藤 かよ
- 相馬 ッキ
- 福島県 坂本キヨ子 富田 ミツ
- 富田 君子
- 茨城県 小倉 洋子 若狭 英子
- 若狭 久男 若狭 明光 倉橋 たみ
- 栃木県 江田 頼一
- 埼玉県 秋本 英郎 秋本 清子
- 浅野 チカ 井沢 なを 小野 リエ
- 小野 博孝 北原ひで子 藤田 羊一
- 山下 みつ 桜井 かね 鯨井 久八
- 野田 雅子 服部 陽一 天野 好子
- 菅野 久雄
- 千葉県 加瀬 よし 加瀬 きく
- 浄永 孝 津久井艶子 芳賀タツエ
- 宮本 豊吉 谷沢 英子 岩佐 とみ
- 川間 つね 横浜 福居 横浜 きん
- 吉田 久光 田中 雄吉
- 東京 内海 静枝 内海 淑子
- 浮田 桜代 石谷 典夫 荒木 常子
- 遠藤 安男 大石 潔 押谷 義雄
- 国松ふみ江 栗原 利雄 黒川 誠

- 黒川 直吉 小山キミ子 佐竹 エス
- 佐藤 宗丕 佐藤 なを 齊藤耕太郎
- 齊藤 芙美 菅谷喜代子 高橋 鎮夫
- 佃 喜美 長尾 静子 昼間 楽平
- 昼間志津子 鈴木つな子 中村 久
- 中村 順子 大給 湛子 田中 猛
- 水野 はな 坂本美枝子 白井まさ子
- 白井 勝年 白井小夜子 白井 正恵
- 篠崎 英夫 中田 テル 沼山 正英
- 蓮尾 諭吉 松平 永芳 水野 薫
- 森田 喜代 井上 キチ 加藤 ヨウ
- 秋元 輝夫 山森 久江 小林 法子
- 神奈川 石渡 綾子 岩田とし子
- 赤坂 スズ 薄井 満喜 榎本 益明
- 榎本 幾子 大石 岳男 大石 明裕
- 大石 昌 大畑 秀子 岡野 正文
- 片山 計 栗田千代子 宍戸 吉郎
- 宍戸 偉 杉田 寿雄 杉田 絹江
- 田中 菊枝 土屋 太郎 西森サツキ
- 安室 慶二 水上 逸 内山 浅子
- 新潟 青木 謹次 片桐 銀蔵
- 小林 トシ 江村 源次 江村 一美
- 坪井 繁男 渋谷セキノ 新保 晃
- 高橋 梅子 山田 正三 山田キヨエ
- 米田 トシ 齊藤キクノ 齊田ヨシエ
- 橋本 淑子
- 富山 池田 淑子 棚橋 昭二
- 寺西 ヒサ 村楳 光栄 田賀 朋子
- 福井 田賀 将一 田賀 護
- 田賀 英子 田賀 奨
- 田賀 茜 坪内 一枝 林 廣
- 長野 伊藤ますの 林 廣
- 山田 二美

お便りの中から

福島県 富田 ミツ

前略御免下さいませ。

今年の慰霊祭、直会旅行等に皆様と一緒に参加できませんでした。無事帰りまして。有難うございました。これも会長様始め奥様、役員の方々が並々な御世話下さいました御陰と感謝申し上げます。厚く御礼申し上げます。

成田山を除いては全部初めての所でございましたので、大変楽しくお参りさせていただきました。雨さえ降らなかったら絶好の季節でしたのにそれが残念に思いました。

それでも久しぶりに靖国神社の満開の桜を見ることができて嬉しく思っております。

来年は三月末の日曜日ですので小学生を連れて行くことしておりますのでよろしくお願ひ申しあげます。

尚二十八日のブラウン座談会は予定がありますので残念乍ら失礼させていただきます。

事務局 日誌

- 愛媛県 松友 都
- 福岡県 鐘ヶ江敬介 近藤 章
- 近藤シズエ 橋本マサエ 平田 郁子
- 長崎県 前田 フサ 片山美千代
- 宮崎県 高橋 重美
- 鹿児島県 村上 義博 村上 芳江
- 県不明 宮原才五郎

1月1日 靖国神社参拝 平成四年度の慰霊祭申込(佐藤)

1月12日 生還者有志と懇談、四名

1月15日 故浮田名誉会長一年祭

3月11日 会計監査

3月17日 役員会 総会と慰霊祭の準備ほか

4月1日 日本遺族会主催現地慰霊団結団式(佐藤・秋本参加)

4月7日 慰霊祭 総会 直会

4月22日 靖国神社春季例大祭(佐藤)

4月28日 ブラウン環礁座談会

5月11日 55号編集会議

5月15日 厚生省援護局 打合せ

5月27日 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拜礼式 (秋本)

5月28日 日本遺族会と資料照会

6月9日 55号編集作業

6月15日 55号割付(佐藤・秋本)

7月13日 靖国神社たままつり

7月20日 役員会

7月下旬 55号校正 発送作業

塚野ヨシ子 村上佳寿子

◇大分県 石塚 文子 木村二三夫

◇宮崎県 友枝カオリ 森 フサエ

山口 ミツ 山口マサ子

◇鹿児島県 富山 フキ 和田 芳久

野平 ヨネ 村山 ノキ 浜崎 武一

原田 惟行

◇沖縄県 石原 キク 宮城カマド

玉那覇有賢

◇会友篤志会員等 足立 広信

井上 義夫 江村 源次 篠崎 英夫

須藤 伝 豊谷 秀光 吉良 正義

馬場 直人 川副 克巳 秋元 輝夫

土屋 太郎 松平 永芳

以上は平成二年十二月一日から本年

五月三十一日までに寄付された方々、

二九八名で、その合計金額は一、三九

二、三八〇円でした。

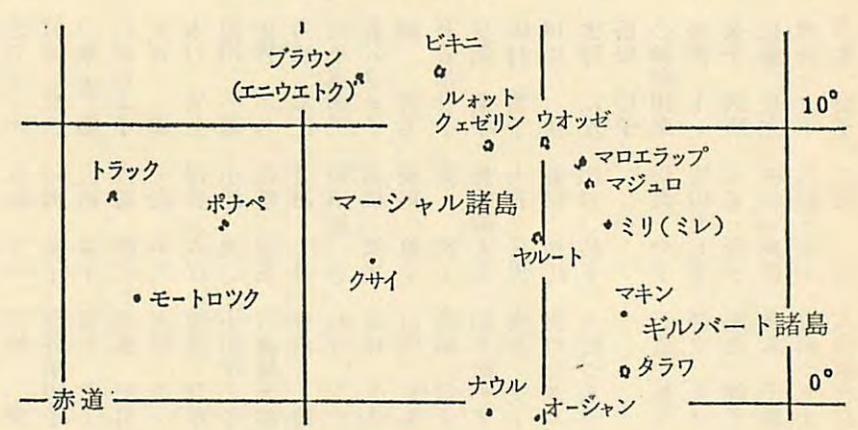
現地慰霊を 希望する方々へ

厚生省主催の平成三年度現地慰霊は 「平成四年二月中旬に実施の予定」と 発表されました。

この慰霊団に参加を希望される方は 環礁54号3頁をもう一度よくお読みく ださい。

申込みは、各都道府県の厚生(援護) 主管課で行うこととなります。

募集人員に限りがありますのでなる べく早く居住地の県庁主管課に電話で



本部だより

☆いま会員名簿を作っています。今年 四月の慰霊祭に参加又は不参加の通知 はがきを原稿として新しく作りなおし ています。

はがきを出さなかった方、又は出し たあとで変更のあった方は、八月二十 日までに名簿資料をお送り下さい。

新名簿は、会費完納済みの方に、年 末までに無料でお送りします。

☆会務に御協力頂けるボランティアの 若い男女若干名を求めています。

会員皆様の親族、知人等で、東京又 は近県在住の方のうち本会に奉仕して 頂けそうな方がおりましたら御推せん 下さい。

やって頂く作業は、年二回の会報 「環礁」の編集、校正のお手伝いや年 一回の慰霊祭の時のお世話などです。

☆会費完納のおねがい

本会の活動に必要な経費はすべて会 員と会友の浄財だけで賄われており、 他からの補助等は一切ありません。会 を長く続けてゆくためには財政の安定 が是非とも必要でありますので、会費 の完納に御協力下さい。

今後は会費を納めない方は退会の申 し入れあったものとして、会員名簿か ら削除し、会報「環礁」の発送を中止 しますので、事情御賢察下さいまして、 悪しからず御了承下さい。但し、特別

の御事情のある方とは個別に御相談し たいと思いますので、御遠慮なくお申 出下さい。

☆入会のおすすめ

本会は会則にもありますように、遺 族であって、会費を納めた者だけを会 員として登録し「環礁」をお届けして おります。

この会のあることを知らない方が沢 山居ります。お知り合いに本会をPR して下さい。マーシャル諸島とギルバ ート諸島方面の戦死者の親族ならば誰 でも御入会頂けます。同方面に勤務さ れた戦友の皆様には会友として御参加 頂いております。

会員、会友とも年会費は二千円で入 会金は要りません。

☆本年度の各種委員が次の通り委嘱さ れました。

▽広報委員 秋本 英郎 佐竹 エス 昼間 栄平

荒木 常子 石谷 典夫 黒川 誠

▽直会委員 佐竹 エス 荒木 常子 高林 芳夫

本 部

〒103 東京都中央区日本橋人形町 一八一二(泉商事ビル)

マーシャル方面遺族会

電話 〇三―三六六一―八七六〇 FAX 〇三―三六六一―六二四一